



Spade's Delivery Health

R18
ADULT ONLY

KATEKYO HITMAN REBORN! Fanbook

D. Spade's Delivery Health

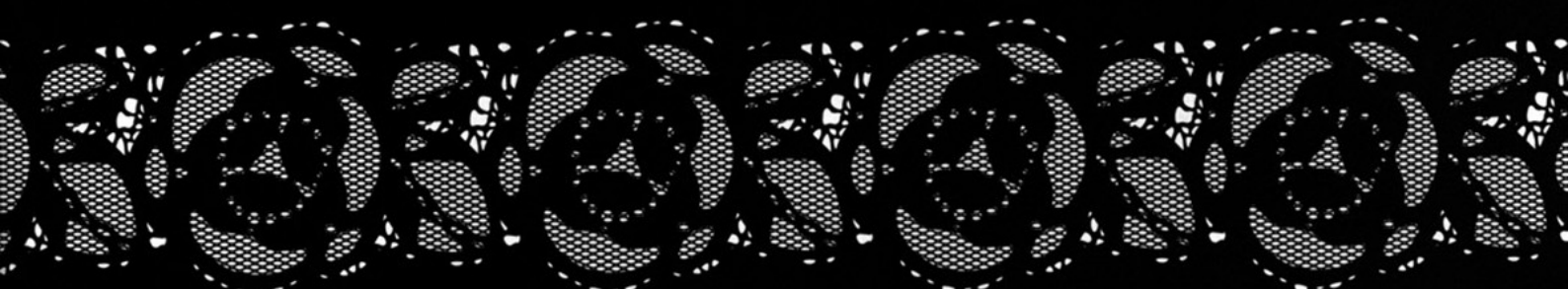




まえがき

こんにちわ、百瀬りんです。
この度はこの本をお手に取って頂きありがとうございます！

スペたんがデリヘルで働いているという前提での漫画となっております。
主人公はあなたですので、どうぞ主人公の気持ちに投影してお読みください♪





わあ
すごいキレイなんだね

ふうん...
スピードさんって
いうのか

そんな俺が興味本位で
見ていた風俗のサイトで
彼を見つけてしまった



俺は名無し
大学生にして童貞で
恋人なし
ちほみに正真正銘の
「イ」だ

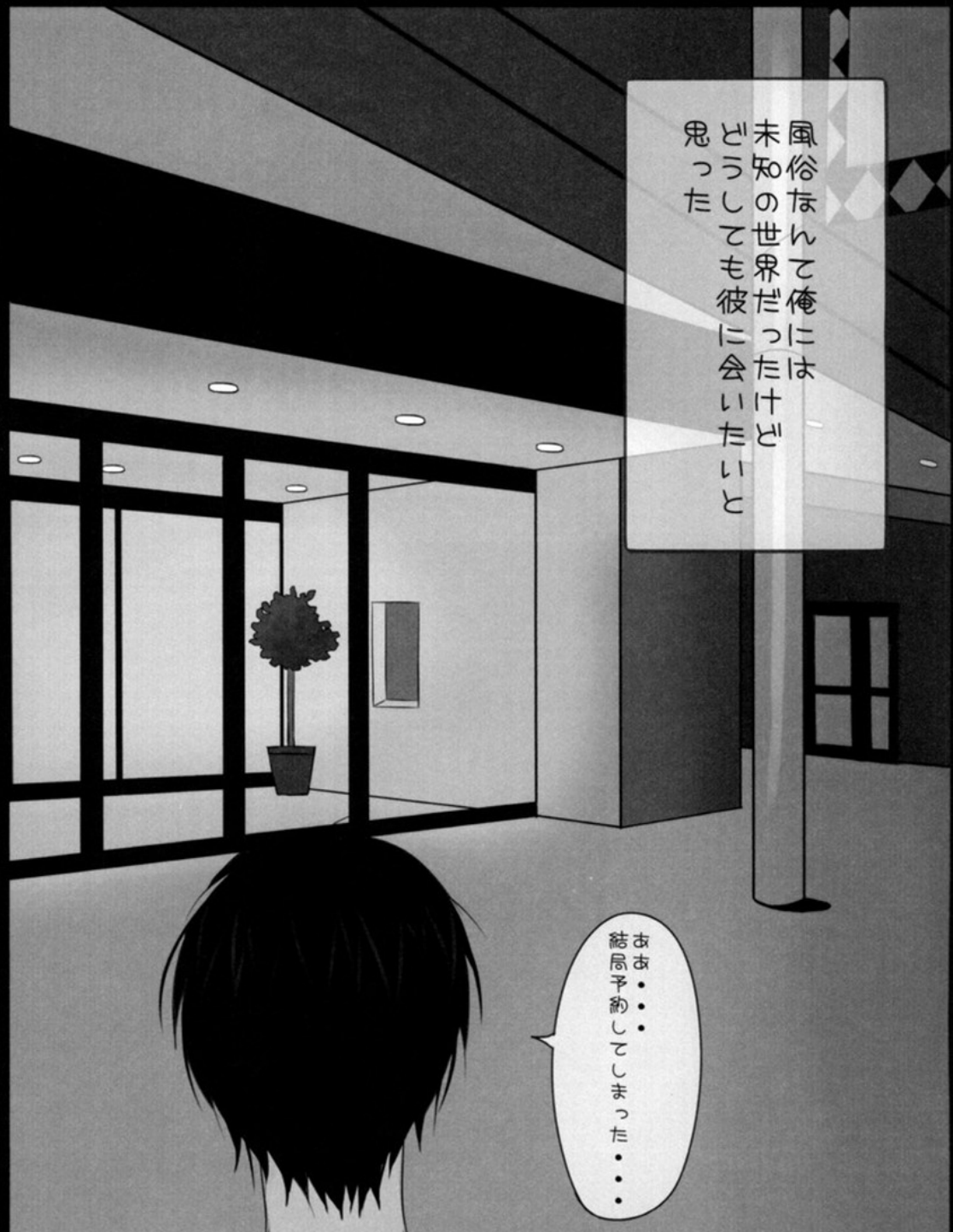


あっ

ほんか怖くはって
きたぞ...!

うわ...俺マジろ
何やってんだろ

あの...
名無しさん...ですか?



風俗なんて俺には
未知の世界だったけど
どうしても彼に会いたい
と
鬼

あ...
結局予約してしまった...

はじめまして
あ、初めまして
俺、初めまして
色々よろしく
お願いします

はい……

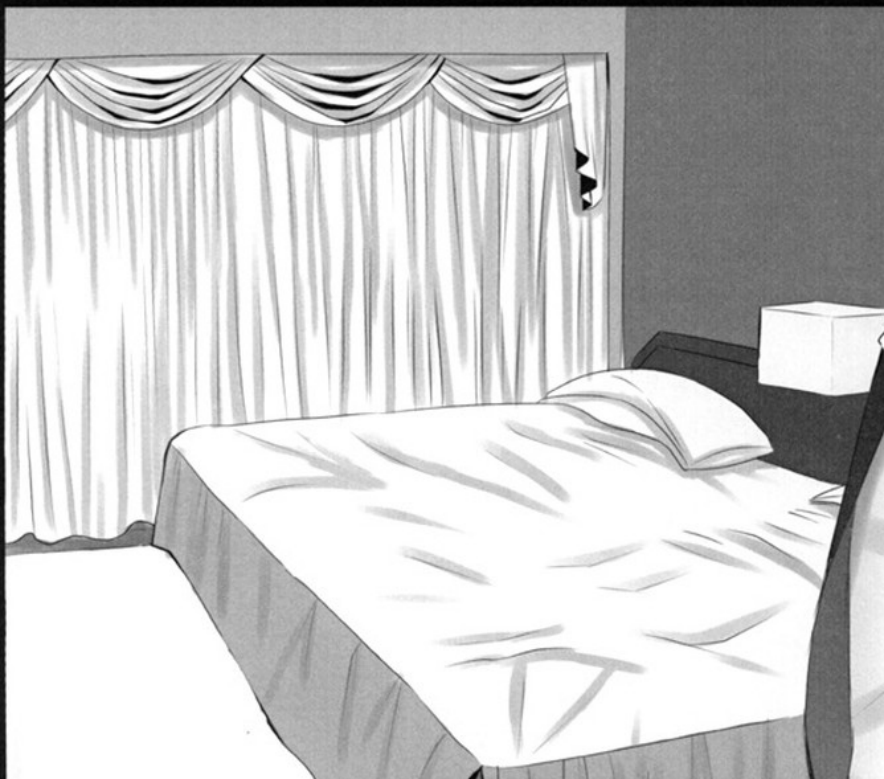
スプーエクス?!

はじめまして
こらばらば

指名を受けました
D・スプードと申します
今夜はよろしくお願ひしますね

はい♥
名無しさんに満足して
頂けるよう
精一杯頑張ります

ほ、本物だー!!





スパードさんとこんな近くにいられるなんて信じられないよ

ヌフフ大げさですね

ホームページの写真を見て一目惚れしたんだ

クールな感じかと思ってたけどすごく優しく対応したよ



うおお！やわらかい！！

ん

キスってこんな気持ちイイのか



ねえ名無しさんキスしましょう？

え？！

いきなりですか！

ほら時間あまりないです

え、あ、あ、あ



はっ

はあ



！！

ぬる



わー！！し、まが！

ちや

ん

と3/6





うわあっ

又フフ
元気があす○すん
ですな♡
ししはが麗しきあやめ♡

きゅんっ



今案にして
あげますから

すす
スーエナ...



ほま

んっ

ちゃっ

ちゃっ



さて...
どう費めて
あげましょっか

んっ



んっ

んっ
ふんふんふんふん♡

出っ
てっ
てっ



お花おち○ちんは
しっかり刺いてあげないと
いけませんな

うわっ
皮にまが!

にゅっ



だめだ
もう出る!!

ぶんぶん



ちゅる

ん



んんんん

はっはっ



はっはっ

いっぱい出ましたね♡



うわ・・・っ
全部吸われて・・・!

ん

ん



今度は・・・
名無しのあちのちんを
私の中に入れてあげましょ

ぜ、前戯はしなくて
大丈夫なの?!



あっ

痛っ・・・

全部入りましたよ

ゼクッ

はっ

スパーエサニ
無難はくしにレ!



ちゅく...♡

ヌフフ・・・

名器と言われる
私を十×ないで
下さい・・・



ズ
ズ
ズ

!?

こわあ



私たちつな
がって
ますよ……♡

アハ……

あ……あ
名無し……♡



大丈夫ですよ
そのうち慣れますから

でも……!

ほま、

は



七ツツ

ああ!!



アハ

スーパーデナ
の中
あ……あ
か……か
く……く
ち……ち
の……の
ぼ……ぼ
に……に
な……な
り……り
そ……そ
う……う
だ……だ
よ……よ



私の中……
気持ちイイですか?

はっ

んっ♡

あ♡

最高だよ!
こんな
に……
気……
は……
生……
ま……
れ……
て……
初……



はあっ
どうしよう
俺、スピードさんのこと
本気で好きになっちゃった
かも



初めてがスピードさんで
よかったですよ



でも、所詮私たちは
客とホストの関係なので

こんな汚い体でも
あなたを愛せると
いうのですか？

スピードさんは
キレイだよ

心も体も

スピードさんは今夜会った
ばかりだけど何となくもう
思ってた……
あなたと寝ていても
いいな

俺はスピードさんを
愛してるよ

名無しさん……
私もあなたのことが……

あなたのことが

大好きです





二二も

あぁ
あぁ

二二も

スピードアップの体は
ど二もキレイだよ

あぁ

あぁ

ふあふあ

ちゅるる



あぁ

ん

あぁ
あぁ
あぁ
あぁ



あつはあ...
私...
た...
こと...
ない...
から

あつはあ...
私...
た...
こと...
ない...
から

はあ
そろそろかほ

あぁ

ん...



俺のちのほもい
がマンできほい



ハキハキ
ハキハキ

早く入れて...

俺のぞいっほ
気持ちよくほ
下さ



あ

はう

ハキ
ハキ
ハキ

あ
あ
あ



ハキ
ハキ

ハキ

ムニムニムニ

じいっ

あっ……ん
気持ちいい……♡

びびっ
クッ

又チツッ
キホフッ
ッ

アッ
ッ

スピードが軽いから
簡単に持ち上げられるよ

私……
名無しのおすのすの
イツちやいます……♡





はぁっ

俺もイキまじだや
中に出していい?

出して
私の中にたくやん...



ひゅっ
ひゅっ

かわいいよ...
スパーエナ...



あっ
にゅああ
あ

名無し
愛してまます
うっ

へっ
へっ

へっ
へっ

へっ
へっ



俺、今すごく
幸せだよ……

良かったですよ
名無し……



か30

♡

第二ラウンド突入
※追加料金発生



ねえ名無し



俺ののの
カカカカ
俺ののの
カカカカ

またいつでも
おたのしみまで
出張しますからね

ご指名お待ちしております
♡



もう一度
ミサコ……？

私まだ足りません

いかがでしたでしょうか。
この漫画を描き始めたのが6月頃だったので
まさかスペたんがリア充とは知らず
勝手にガキホモ設定にしてみました！
どうしてもデリヘルIP0が描きたくて描きたくて。。。！
スペたんのいるデリヘルだったら借金してでも
通いたい限りですw

前回の俺×白骸漫画もそうでしたが
やっぱり私はキャラとイキキャラブるのが
大好きなようです！！
しかし今回はエロ度は軽めになってしまったかなあ。
前半は攻めスペたん、後半は受けスペたんにして
みました。
自分はDMなので、スペたん言葉責めされながら
リードしてほしいですわ！！（もちろん突っ込むのは私ですが）
もっと濃厚なエロ漫画が描けるように精進したいです。



スペたんといえばフリル！
ということでメイドスペたんです。
この絵は元はカラーで描いたのですが
モノクロでの公開となってしまい
少し残念です。
ご注文はもちろんスペたんですよ！



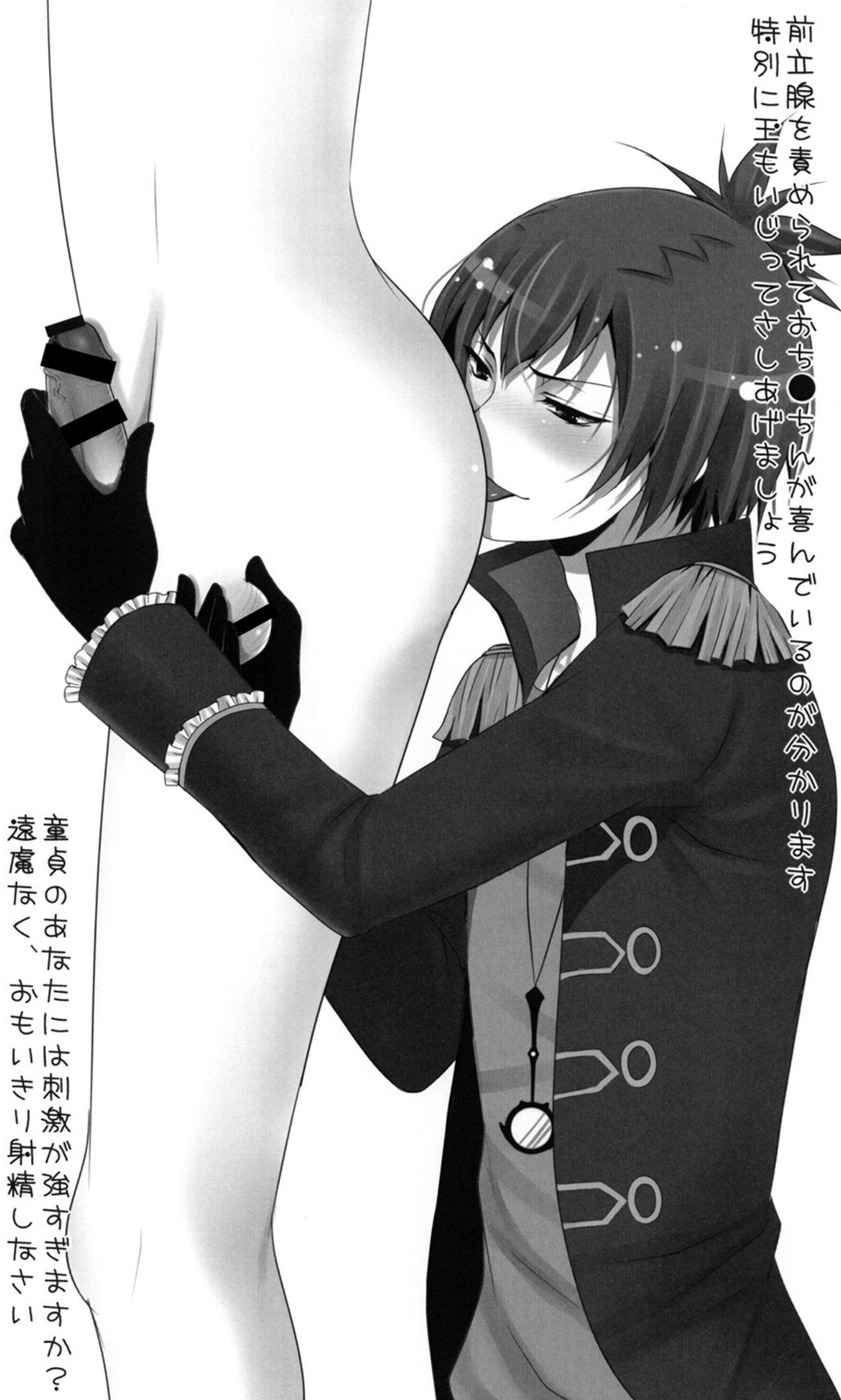


によस्पたんも描いてみました。ちっばい！
やはり貧乳+パイ●ンは譲れませんね。
この幼児体型で成人してたら可愛いと思いますw
小さい胸をもんで大きくしておげたいです。

どうです？私のテクニクは
伊達にデリヘルをやって
いるのではありませんか

前立腺を責められておす●さんが喜んで
いるのが分かります
特別に玉もいじってさしおやまじょ

童貞のあなたには刺激が強すぎますか？
遠慮なく、おもいきり射精しなさい



私の尻穴を舐めて勃起しているだなんて
あなたはどうしようもないド変態ですね♡

ほら・・・もっとしっぴかりご奉仕しなさい？
もう、味わうように・・・♡

これだけで私をイカせることができたら
ご褒美に挿入を許可します

又フワフワの嬉しいでしよう？
あなたのおち●ちんももう限界みたいですよ・・・
精々頑張ることです♡





スパーエナも?!

又フフフフ...
たまには足で
責められていいわ



あ...全

あはははいつも
私に入れてばかり!



うお?!



どうです...
気持ちいいですか?
私の足は

あ...最高だ!
柔らかい足裏が干●ポに
擦れて...
あ!イク!!



はぁ

あ



ん♡
信じられたいほどおす♡
●
すんが
びくびくっしてます
この変態マゾ♡

すあ、私の足の裏を
キレイにしなさい

あまっあっあ...♡
熱いっ♡

自分でぶっかいたのだから
当然ですよあ♡

ねとあ...♡

びくびく

びくびく

びく

スぺたんには足コキされたい！という願望から描いてしまった変態漫画です。
この漫画、実はカラーで描いたのですがお見せできなくて申し訳ないです。
DMホイホイな感じにしてしまったので、DSの方はすみません。。。
スぺたんのブーツ脱ぎたて蒸れ蒸れおんよでゴシゴシされたい限りです♪
白タイトの布地が擦れて最高に気持ちいいんだろうなあ～
きっとスぺたんなら魔レンズを使って、俺の気持ちいいところを的確に
扱いてくれると信じてる！（魔レンズの使い方間違ってる）



表紙没案。

色まで塗ったのですが、なんかしっくりこなかったの
あとスペたんがちょっと淫乱になりすぎたかあと。
表紙絵はいつもすぐ決まるのですが、今回は色々案を
出したりでけっこう苦戦してました。

庶民には手の届かない存在のお貴族様が、最近、一人で街を闊歩しているらしい。

その噂は荒れた街並みにあまりに早く広がっていった。復讐を謳う者、憧れを抱く者、愚かだと誇る者、その反応は様々だったけれど、お貴族様が彼のボンゴレに属すると聞いて、実際に手を出そうとする者はいなかった。

そういかなかった。いるはずも無いと誰もが思っていた。マフィアでも無い、直接には怨恨も無い人間が、まさか近寄ることは無いだろうと。

だから、油断したのでらう。

「すみません、そこのお方」

薄暗い路地裏から声をかければ、その人はピーコックブルーの髪の毛を揺らしてこちらを見た。怪訝にひそめられる眉はしなやかで、その瞳はまだ澄んでいた。人を疑うことも知りながら、何もかもを信じてしまう純な目差し。

「……何か？」

答えず待つっていると、デイモン様は首を傾げながら、こちらに一步一步と歩き始めた。もしかしたら、道端で話し掛けられることも初めてだったのかもしれない。その顔は難し

そうに響められていたけれど、どこか少年のような好奇心に満ちていた。

「道をお聞きしたいのですが」

懐から紙を取り出すと、デイモン様は無用心に顔を寄せてきた。弱者のためを謳うこの方にとって、自分にできることがあるのだというところが、さぞ喜ばしかったに違いない。それならば

「むぐっ!？」

「ちよつと大人しくしてくださいね」

紙を口許に押し付けければ、男にしては華奢な体はすぐに弛緩した。予め、葉を染み込ませておいたのだ。

気絶してしまえば、こちらのもの。

「デイモン様。弱い俺の役に立ちたいでしょう?二人で道を探していきましようね」

俺の胸に体を寄せるデイモン様は、とてもとても幸せそうな顔をしていた。



「どういいうつもりです!?!この手錠を外しなさい!」

ガチャガチャと金属の擦れる音が部屋に響き渡る。その音に合わせて、デイモン様が喋

るから、それは極上の調べになった。

「デイモン様。そんなに暴れたら、手首に傷がつかますよ」

意識のないデイモン様を抱き上げて、俺の家まで連れてきた。ベッドに寝かせて、腕を持ち上げ手首とベッドを手錠で繋いだ。この日のために、できるだけキレイな布を敷いておいた。黄ばんではいても、虫は湧いていないだろう。デイモン様の白い肌に、虫如きが触れていいはずがない。足はすぐに外すつもりで、ブーツの上から荒縄で縛っておいた。僅かに開かれた薄い唇。甘い吐息を吸おうとしたところで、デイモン様は目を覚ました。

間近に俺の顔を見たデイモン様は咄嗟に悲鳴を上げた。その恐怖よりも速い本能的な叫びを食べてさしあげようと口を塞ぐと、デイモン様は大きく開いていた瞳をさらに大きく開いて、顔を背けようとした。逃げる舌は追いかけてに唾内をペロペロと舐め回していると、デイモン様の目から幾筋も幾筋も涙が溢れて……俺はそんなデイモン様が愛しくて唇を離した。

そしてデイモン様は、俺にどういいうつもりかと、聞いた。

「答えなさい!」

デイモン様はまだガチャガチャと闇雲に手を動かしている。

仕方がないので、その胸を跨ぐようにしてベッドに乗り上げた。

「ひっ退きなさい……！」

デイモン様の手を優しく握りしめる。

「デイモン様は、弱者の味方だと聞きました。そうですね？」

「え？え、ええ……」

デイモン様が目をぱちくりする。可愛らしい。

「なら、弱い俺を救ってくださいますね……？」

デイモン様はその小さな口で喘いだ。きつとこの人なら、幻覚や武器を使ってここから逃げることも俺を殺すことも簡単だろうに、それをしないのは、やはり俺がただの一般市民だからだろう。

「……わかりました。だから、この戒めを解きなさい」

デイモン様はあくまで誇り高く命令する。だから俺は頷いて、デイモン様の上で体の向きを変えた。デイモン様の膝裏に手を添えて持ち上げる。

「なっ」

「足の縄を外しますね」

動揺するデイモン様の足から縄を解く。それ程キツくしていなかった縄はすぐに解けた。ついでにブーツもズリと抜き取る。

「何をする！」

デイモン様の股間に左手を置いて、足に顔を近付けた。スン、と音を立ててニオイを嗅げば、デイモン様の体が跳ねる。

「やめなさい！上から退いて！」

またガチャガチャと金属音がする。デイモン様がお体に傷を作る前に、俺は靴下の上からその小さな指を食んだ。

「あっ」

予想通り、デイモン様は動きを止めて体を強張らせる。唾液を丹念に靴下に染み込ませてジュツジュツと吸ってやると、デイモン様の僅かにすえた足のニオイと味が口いっぱい広がった。

「やっ、やめ……」

腕でデイモン様の両足を支えたまま、今度は靴下を脱がして、指の一本一本を順番に口に含む。指の股をペロペロ舐めると、デイモン様の股間が反応するのが左手に伝わってきた。

「デイモン様のおみ足、おいしいです」

「……いい加減に……！」

デイモン様が腹筋に力を入れたのが尻に伝わってくる。

「ああ！」

だから抵抗される前に、少々乱暴ながら、服の上から陰茎を握りしめた。

「やっ……やめっ……あ、うっ」

しばらく揉んでいると、その内にデイモン様はグツタリと体を弛緩させた。反対に、手の中のモノは固くなっている。

「随分、無沙汰だったんじゃないですか？」

先走りは服を沁み出て手まで濡らしている。デイモン様が無言なのをいいことに、テントを張った苦しそうな下半身から一気に衣服を引きずり下ろした。

「何を！」

髪の毛と同じピーコックブルーの下生えが、申し訳程度に大切なところを守ろうとしている。白い肌にその色はよく映えた。美しい。毛の流れに沿って撫でれば、デイモン様の体は大きく震えた。

「解放して差し上げましょうか」

振り返れば、デイモン様は鋭くこちらを睨み付けた。その瞳には僅かに劣情が潜んでいるけれど、まだ我を忘れる程では無いらしい。仕方がないので、俺は懐から小瓶を取り出す。

そしてそのまま、中身をデイモン様の性器にぶちまけた。

「ひいっ！冷た……」

デイモン様から可愛らしい悲鳴が上がる。

「大丈夫です。冷たいのは最初だけですよ」

「あっ……あっ……！」

次第に熱を持って痙攣するデイモン様の上から退いた。目を覗き込めば、もう焦点は合っていない。潤んだ瞳には、何も映りはしない。そこにあるものは、濡れた欲だけ。

「デイモン様のために、色々用意したんですよ」

戸棚をあさって、ガラス棒を取り出した。上の口からは喘ぎ声を、下の口からは先走りを漏らすことしか知らないデイモン様の、下のお口に、棒の先を宛がう。

「まずは栓をしましょうね」

「ひぐっ……い、痛い！やめ、やめて……嫌あ……！」

小瓶の中身とデイモン様の先走りの滑りを借りて、ガラス棒をズブズブと陰茎に飲み込ませていく。

「あ、熱い……！」

半分まで入ったところで上下に動かすと、デイモン様は狂ったように首を横に振って涙を散らした。

「やっ、あ、はっ、あ！あっ、あっ、あっ、……！」

ガラス棒を突き入れれば苦しうに息を飲むのに、引っ張れば腰ごと体を持ち上げて質量を追う。その体はうっすら汗ばんで、白かった肌は赤く染まっている。

「気持ち良いですか？」

「やめて！やめてくださっ……あっ……こ、壊れる！いやっ……私、壊れてしまう……！ああっ！」

狭い部屋にデイモン様の声と水音が響く。安物のベッドが今にも壊れそうな音を立てる。ガチャガチャと煩い手錠の鎖の音さえ倒錯的だ。

「ひうっ」

「まだ、達してはいけませんよ。これは栓だと言ったでしょう？」

ガラス棒を深く突き刺して手を離せば、デイモン様は唇をギュッと噛みしめて、体を強張らせた。涙が頬を滑って、シートに染み込んでいく。虚ろな目は、まだ熱に浮かされているようだ。

後ろの口に指を寄せると、デイモン様の体は面白い程に跳ねた。

「なっ、何……？」

頑なに結んでいた上の口は驚きに開き、目は濡れたまま、それでも焦点は合っていた。

デイモン様が、俺を見ている。

「痛くないから大丈夫ですよ。薬が効いていきますから」

「く、薬……！あっ」

指で後孔を左右に広げて、張り型を押し込んだ。

「あふっ……ぐ、う、あ、んー……！」

力を込めれば、張り型はデイモン様のナカに簡単に埋まっていく。

「奥まで、入りましたね……」

少しだけベッドから距離を置くと、デイモン様は詰めていた息を吐いた。その吐息は熱っぽく、胸が上下すると同時に腰まで揺れた。

「お、願ひ、です……外して……」

消え入りそうな声で懇願するデイモン様。

「どれをですか？」

手錠か、ガラス棒か、張り型か。

「全部……全部です……！」

「本当に、良いんですか？」

ガラス棒と張り型に同時に手をかけて軽く引くと

「ひあっ」

デイモン様の体が跳ねる。

そのお顔は熟れて、蕩けている。なんとも美味しそうだ。

「本当に、外してしまっって良いんですか……？」

ゆっくり、ゆっくりと引き抜いていく。デイモン様の腰が僅かに揺れる。「あっ、あっ」と嬌声が甘く部屋に響く。

「あああっ！」

ついに二つの穴が解放された瞬間、デイモン様は達した。陰茎がしなり、白濁が飛び散る。

「あっ……うそ……」

濃い粘液はどろどろと鈴口から溢れ続ける。尻穴が失った質量を求めてパクパクと喘いでいる。

「ダメ……体が、熱い……!」

デimon様がまた手錠をガチャガチャと鳴らす。

「外して!外してええ……!」

もはやデimon様は全身を激しく揺らしていた。その体は熱を持って、快楽を追っている。穴という穴が今、俺を求め、デimon様が懇願している。

「ふああっ……!」

陰茎を握りしめると、デimon様の動きが止まった。手の中のソレは、火傷しそうに熱く、脈打っている。

「あっ……んっ」

デimon様が生唾を飲み込んだ。

目は、俺の手を。そして俺の下半身を見つめている。

欲に蕩けたその顔が、愛しい。

「手錠を外しましょう。そろそろ、帰られた方がいい」

デimon様から手を離して、錠を取り出し、言葉通り手錠を外した。

しかし自由になっても、デimon様は動かない。

信じられないものを見る目で、俺を見つめている。

「どうしましたか?」

尋ねても、その小さなお口は甘い息を浅く速く吐き続けるだけ。

目だけが雄弁だった。

「……欲しい、ですか?」

長い上下の睫毛が絡まりあった。色を増した唇がわななき、そして

「はい……」

と、小さな声が。

「……俺が?」

「……あなたが……」

「デimon様は、欲しいと」

「はい……もう……焦らさないで……!」

顔を近付けければ、デimon様が俺の首に腕を回す。

「いいんですね?俺のを挿れて、いいんですね?」

「早くうう……!」

——ついに俺たち、道を見つけたんですね。

「ひあああああんっ」

きっと二人で、幸せになりましたよね。

こんにちは、はじめまして。常葉紅紀と申します。
俺スベ書かせて頂けて楽しかったです。少々やりすぎた気もいたしますが
全ては全て、愛ゆえに…! (すみません…)

りんさんの俺スベ、ちょう楽しみです!

この度はお誘い本当にありがとうございました!!!

常葉紅紀 (胡蝶の夢)

<http://kotyounoyunemu.web.fc2.com/>





おとがき

最後までお付き合い頂きありがとうございます！
読んで下さった方、そしてゲストに素晴らしい作品を書いて下さった常葉紅紀さん、
本当に感謝です！
皆様のおかげで俺スぺ本を作ることができました。
スぺたん愛してる！！
少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

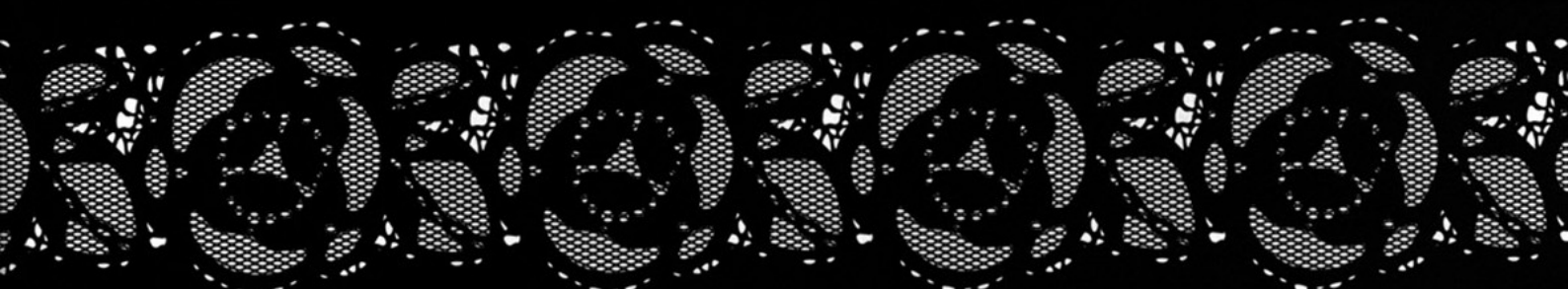
また次の本でお会いできることを祈って。

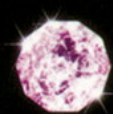
2011.09 百瀬りん

でり♡すぺ

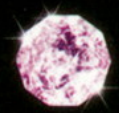
発行日：2011/10/10
発行者：PINK WHIP/百瀬りん
HP：<http://pinkwhiprin.web.fc2.com/>
印刷：(株) 栄光さま

18歳未満の方の閲覧、購読を禁止します。
発行元の許可無く各媒体への転載、複製、複写を禁止します。





PINK WHIP



Rin Momose presents
2011 autumn

